15. 地域連携活動

15.1　来人喜人里創りプロジェクト

実施団体名

・石川県立看護大学（代表者　浅見洋）

・連携団体：能登町

概要：

能登町住民の健康な生活を創造するために、本プロジェクトでは看護大学の学生と教職員が教育研究活動として、これまで自治体、住民が主体的に取り組んできた健康と地域共同体の絆に関わるさまざまな社会的文化的な活動に協力、参加、協働し、交流人口を拡大すると同時に、健康づくり運動と健康キャンペーン活動を展開する。特に、健診受診率向上活動を支援し、住民の健康意識の向上を図った。

活動内容

9 月 22 日　「第 27 回猿鬼歩こう走ろう健康大会」に参加。健康キャンペーン実施。

・看護大学の参加者 50 名、健康チェック、健康づくりゲーム

10 月 26 日～27 日　石川県立看護大学学園祭にて「能登町健康特産品クライネメッセ」の開催。

（マルガージェラード、能登高校地域創造クラブ参加）

3 月～　エクササイズ運動量測定

外部報告：

なし

外部資金：

なし

15.2　棚田が織りなす食・緑・健康の郷づくり

実施団体名

・ 石川県立看護大学（代表者　垣花渉）

・ 連携団体：津幡町興津区、石川県県央農林総合事務所

概要：

将来地域の保健や福祉の中核に担う看護職者を育成するため、垣花ゼミでは本学の１，２年生と協働して高齢化・過疎化に悩む中山間地域の健康づくりを通じた活性化策に挑戦した。「棚田の景観」と「住民の優しさ」を活かして人のにぎわいを創出するため、学生は住民と協働して民泊や収穫祭を企画・開催した。一方では、「健康づくり」の調査活動を通じて住民の健康意識の啓発に努めた。その結果、高齢農家のやる気は増進し、「棚田オーナー制度」に今年度より着手することになった。併せて、学生の社会人基礎力は向上した。今後の課題は、このような取組を大学の正課に取り入れるための授業デザインを構築することであった。

外部報告：

・「社会人基礎力育成グランプリ 2014 中部地区予選会」（社会人基礎力育成協議会主催、2013 年 11 月）
・「限界集落の活性化」報告会（津幡町総務部企画財政課主催、2014 年 2 月））

外部資金：

石川県立看護大学附属地域ケア総合センター事業費

15.3　コミュニティ形成を通じた道の駅活性化

実施団体名

・ 石川県立看護大学（代表者　垣花渉）、
・ 連携団体：かほく市商工会

概要：

今春無料化された能登里山海街道を活用して「道の駅高松」を活性化したい地域のニーズに対して、「健康のコミュニティデザイン」を研究する垣花ゼミでは商工会や行政と連携して、海を活かした交流イベントを企画・開催した。「日本海を親子で描く絵画教室」では、学生はパステル画講師と協働して市内 10 組の親子を「道の駅高松」へ招き、日本海に沈む陽光を描写しながら楽しいひとときを作った。また、「ハマボウフウ」の植樹イベントでは、今春道の駅と海岸を結ぶ連絡通路を白い花で彩る仕掛けを作った。今後の課題は、このような交流イベントを道の駅に定着させるための役割分担の明確化であった。

外部報告：

北國新聞 8 月 10 日朝刊、北國新聞 11 月 18 日朝刊に掲載

外部資金：

なし

15.4　世代間交流による「健康なまち」の創造

実施団体名

・ 石川県立看護大学（代表者　垣花渉）、
・ 連携団体：かほく市民部健康福祉課、かほく市商工会、NPO 法人クラブパレット

概要：

病気の予防に貢献できる看護職者を育成するため、働き盛りの運動不足の解消や健康意欲の増進等の「疾病予防と健康づくり」の社会的課題に対し、解決を図る試行錯誤を通じて隠れているリスクを発見する能力の育成をねらったゼミ活動。「世代や職種の異なる人のつながり」という地域資源を活かし、経験を基盤に住民への健康教育に挑戦した。その結果、個人の健康をコミュニティで支える意義や仕組みの難しさに気づいた。自分で考えさせてから失敗させることは「振り返り」の文化を生み、学生の自立を促すとともにチームワークを強固にした。

外部報告：

なし

外部資金：

なし

15.5　たかまつまちかど交流館の活用と地域振興のための調査研究

―みんなが交流できる場所づくり―

指導教員　石川県立看護大学　看護学部　川島和代　教授、森田聖子　助教
参加学生　石川県立看護大学１年次　林和慶・林凛子・早松未矩・平岡美咲・広崎桃子・
藤井悠希

１．概要

「たかまつまちかど交流館」（かほく市高松）は、人通りが少なくなった旧高松町の中心市街地に再び活気を呼び戻そうと、平成 15 年の市町村合併を目前に、旧北国銀行高松支店跡を当時の高松町が購入し、その運営は地元商店街が結成した『NPO 法人まちかど倶楽部たかまつ』に委託された。この施設は設置から 10 年の歳月を経て、耐震化工事を行うことになった。「たかまつまちかど交流館」のリニューアル・オープンに向けて商店街の活性化にもつながる新しい提案を要望された。

そこで、「たかまつまちかど交流館」の課題を明確にし、その解決の一助となる新たな提案を行うことを本調査研究の目的とした。活動の前半ではフィールド・ワーク、聞き取り調査を中心として「たかまつまちかど交流館」の課題を洗い出し、『NPO 法人まちかど倶楽部たかまつ』理事会において改善点を提案した。活動の後半には、七尾の一本杉商店街に『NPO 法人まちかど倶楽部たかまつ』の理事と共に視察に出向き、商店街の散策・住民の方々から講義を受け、インタビューを実施し、活性化の取り組みの実際を知ることができた。これらを踏まえて、「たかまつまちかど交流館」の活性のため、理事の提案に協力して「まちかど歴史資料室」の設置に学生も協力し、3 階の空きスペースに開設した。さらに、地域の内外に「たかまつまちかど交流館」の認知度を高めるために、学生が考えたコンセプトに地域の方の意見を取り入れ、「たかまつまちかど交流館」の新たなシンボルとなる壁画制作に取り組み、完成した。今後、この壁画があることにより、地域の認知度が高まり、PR 効果があるか、来館者の推移等を見守ることが重要と考えている。

『NPO まちかど倶楽部たかまつ』の理事より、学生の来館や意見が交流館を活性化することにつながるとの意見を頂いた。さらに、来館者の中心は、地元在住の高齢者であったが、今後は、子ども達や若い世代も訪れやすい企画の提案を要望されている。地元の大学と地域が連携して交流拠点の特徴や課題を明らかにし、活性化の支援に参画する活動そのものが地域振興となり得ることを学んだ。

２．外部報告

大学・地域連携アクティブフォーラム（大学コンソーシアム石川主催）、優秀賞受賞

３．外部資金

平成 25 年度地域課題研究ゼミナール支援事業（大学コンソーシアム石川）

15.6　被災地仮設住宅住民の孤立化防止の取組

概要：

仮設住宅での生活が長期化する中、被災地住民の中には高血圧やや肥満の増加が問題となっている。そんな中、被災地住民の孤立化は孤立死という悲劇に結びつく可能性が懸念される。そこで今回の活動は被災地の NPO 法人亘理いちごっこと連携して、これらの健康問題や孤立化を防止する活動を行った。

災害ボランティアサークルふたばの HP と Facebook ページを設け、被災地住民との SNS を通じた交流を行った。また SNS の利用が可能でない方とは、はがきや手紙を通じた交流を行った。

春休みを利用した亘理町でのボランティア活動では、仮設住宅の個別訪問や集会所でのサロン活動の際に血圧測定や健康教育を行い、交流の輪を広げる取り組みを行い孤立化防止のための交流を継続発展させた。

外部報告：

被災地 Home Coming Day パネルディスカッション「聴き、支えあう今」活動報告

外部資金：

大和証券福祉財団平成 25 年度（第 3 回）災害時ボランティア活動助成

15.7　能登キャンパス学生教育・活動支援事業

―２市２町を対象とする地域看護フィールド教育―

指導教員　石川県立看護大学　看護学部　曽根志穂　助教、塚田久恵　准教授、川島和代　教授
参加学生　石川県立看護大学４年次　赤島愛、大塚那月、笠嶋愛実、北井伶奈、東出桜、平山愛理、濱田美保

１．概要

地域看護学実習において、学生らが主体的に企画した住民への健康教育を幅広く展開し、住民の健康保持・増進に寄与し、健康なまちづくりを支援する、学生が住民のセルフケア能力の向上に貢献する公衆衛生看護技術、看護援助（健康教育）を展開することで、その働きかけの方法や援助のあり方を考察し、自己の看護観を発展させることを目的とし、以下のとおり学生による健康講座を行った。

【第 1 弾】「知って得する！夏を元気に過ごすコツ！！」

日時：平成 25 年 7 月 17 日（水）

場所：能登町、輪島市

対象：能登町　内浦健康クラブ会員
　　輪島市　ひまわりクラブ会員

内容：熱中症の症状や予防方法についてのお話

【第２弾】「むし歯を防ごう！」

日時：平成 25 年 9 月 12 日（木）

場所：穴水町

対象：１－２歳児とその母親

内容：幼児のむし歯予防についてのお話

学生たちは手作りのポスターやパンフレットを用いて、あるいは紙芝居や寸劇を取り入れた丁寧な分かりやすい内容を心がけてお話をし、住民の方々は熱心に聞いてくださった。住民からはさまざまな質問があり、学生たちはそれらに真摯に一生懸命回答することで精一杯の様子であったが、住民の健康への関心の高さを感じていた。

地域看護学実習は 3 週間という限られた期間の中で、学生たちは実習目標と自己の実習課題について学習している。対象集団に対する健康教育の計画・実施は都合上 1 回のみ行なうことが多いため、今回のように評価後の展開まで進める機会があることにより、学生たちには一層の達成感・充実感が生じ、その看護援助方法の考察が深まったと思われる。そしてなによりも住民とふれ合うことが一番の喜びにつながっていたようである。

２．外部報告

能登キャンパス構想推進協議会 平成 25 年度 課題成果発表会

３．外部資金

平成 25 年度　学生教育・活動支援事業　学生教育支援（能登キャンパス構想推進協議会）